



2000. 11. 10 No.23

Eastern Japan Section, The Japanese
Association of College and University
Archives

2000年3月16日(木) 研究部会

「『大学史をつくる－沿革史編纂必携』 編さんをめぐって」の報告を終えて

東京大学史史料室 中野 実

昨年6月に上梓した標記『大学史をつくる』（東信堂、『つくる』と略記する）の編纂をめぐって、報告をさせていただいた。あとにもさきにもこのような機会はもうないだろう。貴重な機会を与えてくれた本協議会に感謝する。報告のあとの率直な感想は、報告はするものだ、の一言に尽きる。報告は聞くより、行うほうがずっと身になることを、実感させていただいた。当日の報告を基本にして、質疑応答、研究部会の記録なども盛り込み、まとめてみた。

報告の概要

報告はⅠ『つくる』の概観、Ⅱ編纂と大学アーカイブス必携、2部に分けて行った。『つくる』を編纂趣旨、経緯、概要に分けて、まず概観した。編纂の目的、動機は、はじがきに以下のように記した。「沿革史編纂についてこれまで蓄積された技法や方法を、広く見渡し、確かめ、共有することはできないだろうか。また、教員、職員、理事者などが大学史をつくろうとする時、その最初の段階でつまずいたり迷ったりする労苦を、少しでもやわらげることはできないか。さかのぼって、そもそも大学史を編纂する目的は何なのかを、お互いに理解し合うことはできないか。今こそ、こういう問いに応えるべき好機ではあるまいか。」さらに付け加えれば、寄稿および転載依頼状には、大学史（学校史）編纂

の水準向上と連帶、大学アーカイブス設置の促進、編纂マニュアルの共有、の3点を謳っていた。

編纂の立ち上げから刊行まで予想外の時間がかかった。個人的体験からいえば、立教学院時代から再度の東京大学史史料室勤務に涉っていた。今回の報告の準備のために手持ちの書類を調べたら、1992（平成4）年11月にはじめて原稿の依頼を開始していたことが分かった。刊行までに約8年の期間を費やした計算になる。「編集の都合によって発行が当初予定より大幅に遅れたことを、おわび申し上げねばならない」（まえがき）と記したのは、編者一同の偽らざる心境であった、と言わなければならぬ。概要については、『つくる』の構成にそって説明した。『つくる』は大学史編纂の動向、大学史編纂の体験を語る、大学文書館と創設への提言、外国の文書館、実践編、の5部から構成された。第1部（「大学史編纂の動向」）ではまず日本の事例を編者の一人寺崎昌男氏の論稿でまとめ、外国の事例としてドイツ、イギリス、中国を取り上げた。イギリス、中国は『つくる』のために書き下ろされた。第2部（「大学史編纂の体験を語る」）は私立と国立とに分けて、それぞれの体験を綴って貰った。収録した明治、立教、東大を除き、収録したものはすべて新稿である。『東北大学七十五年史』編纂と東北大学記念資料室を書いていただいた原田隆

吉氏は、『つくる』の完成前に逝去された。第3部（「大学文書館と創設への提言」）は既刊の論稿と資料を再録した。第2部と同様に、漏れ落ちた資料はあるだろうが、本テーマに関する第一歩としてはある程度の広がりと深さを示せた、と思っている。第2、3部は特に本資料協議会の存在があったからこそ出来たと言える。第4部（「外国の文書館」）は実際に現地でアーカイブスを体験した方の短文を掲載した。「イタリアの大学アルキヴィオ」は新しく執筆していただいた。

以上が『つくる』の概観である。さらにⅡとして「編纂と大学アーカイブス必携」の話をした。まず私が担当した第5部の実践編を取り上げた。実践編は「実践案内—編纂のためのQ&A」と題して、沿革史の刊行状況、沿革史誌編纂の資料、資料の収集、統計的数値の変遷、公文書類の所蔵、資料室の設置、関連団体、研究紀要、資料集、から構成した。Q&Aという形式は早くから決まっていたが、構成する事項と内容にはかなりの時間と労力を費やした。出来上がってみると、自分の力量が露になったという印象である。「必携」の話は質疑応答の中で書くことにする。

なによりも『つくる』はこれまでの大学史編纂、大学文書館創設にかかる史料、文書と新稿とを編纂した本として画期的である、と私は確信している。それと同時に欠点も自覚していた。最も大きな欠点は、編纂のために時間がかかりすぎて、史料、文書が古くなってしまったことにあった。古い、ということは単に時間的な意味だけではない。大学史編纂と大学アーカイブスをめぐる状況の変化が、深くかかわっていることは言うまでもない。

質疑応答

編者の一人として、予想外の反応は「大学史編纂の動向」が最初に置かれていることによって、強いていえば拒絶反応を起こす、という意見であった。まったく「素人」として編纂作業に取り組まなければならなくなつた時、『つくる』をひととくとまず何よりも専門的分野の論攷を読まねばならない、というのは負担が重すぎるということであった。『つくる』の冒頭に、研究の動向と課題を据えることは、ほとんど当然のこと、前提と考えていた。しかし、指摘には納得させられる



研究部会（3月16日）

部分もあった。「必携」と題した限り多様な読者を想定して、冒頭に「動向と課題」を置くことに自覺的であるべきであった。一つの代案として「大学文書館とはなにか」を配置したらどうか、という意見があった。もう一つ大きな収穫は、外国の大学文書館を取り上げる場合、日本との比較がほしいという指摘である。資料協議会の人々は、日々現場にて文書館の業務を遂行して、その在り方、将来像などに心を砕いている。彼らはただ外国の事例を受け入れる客体ではないし、受け売りされる必要もない。いま日本の大学文書館が抱えている、現場と抜き差しならぬ課題を、外国文書館から学ぶ必要がある、ということであろう。その意味における大学文書館の論攷は本書を含めてまったくない、と思う。このほかに、編年体に構成されていないと理解されないのでないか—刊行が遅れたため収録した論攷が古くなってしまった—、各部に解題があったほうがよかった、第2部は国立、私立以外に区分がなかったか—編纂部署、体制、刊行期限など—などの多くの意見があった。さらに「必携」にそぐわない、具体的な実態に対応出来ていない、といった厳しい意見もあったが、「実践編」は具体的な課題ばかりに目をやると、すぐに陳腐化する、という指摘もあった。

今回は「沿革史編纂必携」であった。しかし『つくる』の編纂開始後の8年間に大学アーカイブスの状況は大きく変化した。たとえば『つくる』には各大学における大学史講義が取り上げられていない。大学史編纂の広がりとして展示の技法も必要である。このような事項も、いまは課題になっている。つぎには日本における大学アーカイブス必携を編纂することが、私の次の課題になる予感がある。

2000年7月13日(木) 研究部会

特集 授業としての自校史教育 明治大学における授業 「日本近代史と明治大学」について

明治大学歴史編纂事務室 鈴木秀幸

当部会として初の自主研修を行ったのは1997年3月11のことであった。それは「這い上がってきた」当協議会が次代に向けて何をしなければならないのか、という使命感に基づくものであった。また個々の大学、あるいは個人のレベルにおいても大学史の飛躍が求められ、それを共に模索していくかなければならない、という状況によるものもあった。

テーマは「大学史の広がり」であった。この時は東洋大学三浦節夫氏、学習院大学桑尾光太郎氏、そして明治大学の筆者が担当した。その概要是『大学アーカイブス』No.17に『「大学史の広がり」を考えて』と題して、まとめた。その研修の中で筆者は翌月より明治大学で開講する予定の授業「日本近代史と明治大学」について、触れた。当時、筆者には筆者なりのイメージがあった。それは大学史を一本の樹木に喻え、高くて太い幹に生い茂った葉、それを支える根や茎と栄養分。前者は制度とか施設設備、いうなれば目に見えるもの(ハード)。後者は調査とか研究、つまり目にみえにくいもの(ソフト)。そして前者を「大学史の広がり」、後者を「大学史の深まり」とした(のちに、この図式は自省し、修正した。まもなく協議会叢書に発表予定)。そして、大学史の授業の場合は前者とした。ただし、ひとつの事柄をどちらかに分けることが難しい場合もある。例えばその大学史の授業と教材研究をしている時は後者、カリキュラム化され、講義をしている様は前者といった要素もある。だからあまり区分にこだわらない方がよいかもしれない。あくまで、目標達成のための指標とか目安である。

そもそも明治大学において自校史を授業として取り上げようとした要因は2つある。ひとつは大学史編纂の立場からのものである。



報告する鈴木秀幸氏

すなわち、長年かけた『明治大学百年史』の編纂が終了し、大学史の新規事業を模索する中から生み出されたものである。もうひとつは学校教育の立場からのものである。すなわち、大学の個性化、カリキュラム改革、ひいては大学改革によって考案されたものである。いずれにしても、学内教務部委員会、学部間共通総合講座委員会等の議を経て、1997年、和泉校舎(文系1・2年対象)に開設された。その後、他のキャンパスからも開設の要望が高まり、1999年4月からは和泉・生田・駿河台と全キャンパスで開講されることとなった。その間、関係者により隨時、見直しの検討会や研究会が開かれた。とくに1999年11月には座談会の形をとりつつ、大きな会議を催した。

今年度の場合、講義担当者は12名であり、一人当たり1コマから16コマを持っている。受講者はキャンパスにより異なるが、60名から120名くらいである。評価は通年受講は4単位、半期受講は2単位とし、各担当者の課すレポートと出席度をもとに、最終的には各キャンパスのコーディネーターが総合的に行っている。

大学史という学問が若く、また本格的な自

校史教育ははじめてであるので、講義担当者同士が連絡を密にすることはいうまでもなく、また多くの関係者の声を進んで聞くことに努めている。例えば、最近では次のような学生の意見が検討の題目となった。

- (1) 授業担当者が変わると「流れ」がつかめなくなる。また、重複した内容になる。
- (2) レポートを課すことが多すぎる。
- (3) 講義形式が一方的なことがある。
- (4) もう少し学生が興味を持てる課題を取り上げてほしい。
- (5) 学部のことを取り上げてほしい。

もちろん、これらのことに対して正反対の意見を持つ学生もいる。例えば(1)については、多くの教員の意見を聞いてよかったです、講義内容の再確認ができるよかったです等々である。それらの意見を検討して、修正や変更をしているが、その事例をあげてみる。1999年度より、とくに和泉校舎（1・2年）の学生を意識して予科教育を、また生田校舎（理系）の学生のために科学教育史や理系卒業生の動向をテーマに組み込んだ。

それでもなお課題は少なくない。いくつかを列記してみたい。

- (1) 本講義と大学全体の方針・経営・教育との関わりや位置付けをどのようにするのか。

- (2) 受講する立場になってどのような授業をするのか。例えば学生の参加、「動的」な授業、「うける」授業と「地道な」授業の関係、「大学史」を聞く場合と「近代史」を聞く場合との差
- (3) 自校史における「負」の部分の扱いについて

最後に大学史料委員会・歴史編纂事務室と教務部委員会・教務課との関係をいさか述べておきたい。平たくいえば、前記の図式に当てはめれば、授業内容の検討や教材提供といったソフトの部門は前者、教学上のセッティングや事務といったハードは後者、その調整・総括は両者で当たることになる。

とにかく、大学史および大学史教育は新しい学問であり、教育である。それゆえに新たな大学の教育や研究のあり方をめざして試行している段階、といってよい。学内では教学と法人の部門が、授業担当者同士が、さらには教員と学生がともに考え、実践していく必要があろう。また、各大学間でこうしたことの交換・交流を活発化させねばならないであろう。当部会が今回、こうした機会を設けてくれたことは大変、有意義であり、またその最初の報告（2回の内）を担わせていただき、光栄である。

2000年7月13日(木) 研究部会

特集 授業としての自校史教育 明治大学における授業実践 ——教師からの報告——

明治大学文学部講師 長沼秀明

はじめに

私の報告の趣旨・目的は、鈴木秀幸氏の問題提起をうけ、明治大学における自校史教育の授業実践例を紹介することにある。本報告は、あくまでも私個人の授業実践を報告するものであり、明治大学における自校史教育を公式に報告するものではないことをおことわ

りしておく。

I 大学の変容と授業のあり方

1 大学をとりまく社会の変化

(1) 「大学の危機」「大学改革」

18歳人口の半数が大学（短期大学を含む）へ進学する現状のなか、学生の学習意欲が減

退し、「学力低下」が起こっているという指摘がなされ、大学教育の目的と手段とを考え直す必要性が説かれている。

中央教育審議会中間報告（1999年11月1日）は『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』と題し、大学が学生を「選抜」する時代から、学生と大学とが相互に「選択」する時代へと変化していることを述べ、大学側が学生の「受け入れ方針」を明示することが必要であるとしている。

このようななか、大学間競争は激化し、国立大学の独立行政法人化も進行しつつあり、市場競争の原理は「自己点検・自己評価」の名目で大学界にも浸透し、各大学は「自己責任」の名のもとにリスクを背負わされる状況になっている。

（2）知のあり方の変容

ア. 生涯学習社会

「生涯学習」ということばが使われるようになって久しいが、この生涯学習社会においては、学校教育を終了した後でも学習を継続しうる技能・知識・態度が要求される。したがって、生涯学習社会のなかで学校・授業・教師の役割は変化し、研究の方法を教えることが中心になってくる。

イ. 高度情報通信社会

知の集積体としてのインターネットの普及にともない、大学は、もはや知と権威とを発信する最高の機関とはいえなくなっている状況にある。したがって、大学には学位授与権以外の魅力が必要とされてくることが指摘されている。

大学審議会は多様な通信メディアの利用による「遠隔授業」を提唱し（1997年12月）、その後の大学審議会答申（1998年10月）は、単位互換の上限60単位、「遠隔授業」の上限60単位を打ち出し、すでに1999年度より実施されている。

またバーチャル・ユニバーシティも実現化されつつある。

2 問われる各大学のアイデンティティ

（1）求められる各大学の特色

～研究＝教育～

このような、大学をとりまく社会環境の変

化によって、大学とは何か、大学に求められていることは何なのか、ということが問われている。すなわち、大学の研究＝教育のあり方は、どうあるべきかということが世間から厳しく問われているのである（私の場合も、一教師としてできることは何か、が厳しく問われているということである。）

（2）明治大学の場合（私の考え方）

明治大学の場合でいえば、明治大学では、どのような人を育て、社会に送り出そうとするのか、という厳しい問い合わせが世間から突きつけられていることになる。つまり、明治大学の研究＝教育目的と、研究＝教育方法の明示をすることが、大学全体、そして一つ一つの授業において求められているのである。明治大学にとって、世間から問われるのは建物だけではなく、明治大学における研究＝教育の中身、すなわち、たとえばリバティタワーの中の一つ一つの教室で行なわれている授業をどうするか、という点なのである。

そして、この問い合わせに対する回答のよりどころ・指針として、建学の理念・精神というのが、大学全体および一人一人の教師にとって重要なものとなってくるはずである。

3 私の授業実践

（1）基本理念

以上のような状況のなか、一人の教師として私が日頃どのような点に留意しつつ、授業一般に取り組んでいるかという点に、まずはふれておきたい。

私が大学の授業を担当するにあたって最も大きな影響を受けた一冊の書物がある。それは中京大学教授の浅野誠氏が著した『大学の授業を変える 16章』（大月書店、1994年）である。私が、この本から学んだことは、以下の点である。

まず、大学の授業の目標は、大学生としての力量を身につけてもらい、社会に送り出すこと、そして学生を研究主体として育てるにあるということ。

つぎに、講義・演習・実習という区分は制度的なものであり、とくに講義科目は「連続講演会」となってしまっており、学生は「聴衆」になってしまっているという現状にある

が、一つの授業のなかでの多様な授業形態を採用することによって、講義・演習・実習の区分は必ずしも重要性を持たなくなること。

授業では研究方法を教えることが重要な課題となること。すなわち、討論・プレゼンテーション・レポート・論文などの指導をつうじて、研究方法を教えること。

学生の授業外での研究活動を重視すること。

授業は共同作業・共同討論であること。グループ編成をつうじて、学生相互の教育力に重きをおくこと。

小学校・中学校・高等学校の授業実践に学ぶこと。

厳しさとたのしさとを大切にすること。

(2) 通常の授業形態

以上のような基本理念のもと、現在、私は担当科目において（講義・演習の区別をさほど重視することなく）、課題提示（授業）→課題作成=事前レポート作成（授業外）→討論・発表・作業など（授業）→報告書作成（三重大学教授・織田揮準氏作成「大福帳」への記入）（授業）→補足的講義（授業）という形態をとって授業をすすめている。

現在の私は、日々の授業に悩みながら、そして、目の前の学生諸君の成長を願い、期待し、その姿に一喜一憂しながら、大学の授業のあり方そのものを変革する必要性を痛感しているところである。

II 自校史教育の意味

1 学部間共通総合講座「日本近代史と明治大学Ⅰ・Ⅱ」のねらい

いささか“前置き”が長くなってしまった感があるが、自校史教育という本題に入ろう。明治大学における自校史教育の授業である学部間共通総合講座「日本近代史と明治大学Ⅰ・Ⅱ」では、担当者全員の共通理解ともいべき事項として、つぎの点がきわめて重要である。

(1) 授業の目標

- 1) 日本の近代化と明治大学との係わりを社会的事象をつうじて明らかにする。
- 2) 当時の明大生の精神風景を豊富な資料に基づき紹介する。

3) 「学問的思考力と健全な愛校心」とを育てる。

（「1999年度 学部間共通総合講座 授業概要」より）

ここで重要な点は「健全な愛校心」とは何か、ということである。もちろん、〈明治大学で学んでよかった〉〈明治大学が好きだ〉という気持ちが基本にあるとしても、「健全な」というからには、それだけではないはずである。おそらく、これは、母校を客観的に眺めることのできる目を在学中・卒業後ともにもつ、ということを意味するものであろう。

すなわち、〈ケース・スタディ〉としての明治大学史（研究=教育素材としての明治大学史）という、この科目の特性を考えると、明治大学史から何を学ぶか、ということが一人一人にとって問われてくることになるのである。

(2) ユニバーシティ・アイデンティティの確立

この講座のねらいは、つぎの点にある。すなわち、この講座は「建学の理念や志、本学の歴史を学問的に学生諸君に学んでもらい、自分が学んでいる大学の本質を確認し、こころの居場所や体の居場所を確認し、ひいては大学の歴史との一体感、ユニバーシティ・アイデンティティを確立することを目指している。／……大学にそくして考えてみると、こうした問は、自分が学んでいる大学の歴史を確認したい、こころの居場所や体の居場所を確認したいという根源的な欲求に根ざしているのではないだろうか。これは自己発見、自己創造、自己獲得の欲求と言い換えてもよい。これは、理論的次元ではなく、感動や心情、心の絆など心情の次元へと還元される。このように、学問的・理論的なものと感性・心情を連結したい媒介したいという要請に応えるために、この講座は設けられたと言っても過言ではない」（別府昭郎教授「はじめに—大学史の見かた」『1999年度 学部間共通総合講座シラバス』；傍線は引用者）。

一般的に学生たちは〈明治大学らしさ〉を知らず知らずのうちに身につけて社会に出てゆくといわれる。しかし、明治大学の歴史をふりかえる・考えることによって、明治大学で生きる・学ぶ（生きた・学んだ）ことの意味を考える、さらには今日の日本社会に生き

ることの意味を考える（在学中・卒業後ともに）機会を、この科目をつうじて得ることができるはすである。



報告する長沼秀明先生

2 学部間共通総合講座「日本近代史と明治大学Ⅰ・Ⅱ」の学問的・理論的支柱

(1) 『明治大学百年史』とその後の成果

この科目には学問的・理論的支柱がある。それは大学史研究である。〈日本近代史のなかの明治大学、そして明治大学のなかの日本近代史〉という基本視角による『明治大学百年史』は、この科目の最大の支柱であり、その後の成果としての大学史料委員会の活動、および『紫紺の歴程』（大学史紀要）の存在は欠かせない。

(2) 歴史編纂事務室の日常業務

そして、現在の明治大学において、明治大学史研究を真に支え、担っているのが歴史編纂事務室である。ここは明治大学史研究の最前線といってよい。『明治大学歴史編纂事務室報告』（史料集・史料論集）をはじめ、すぐれた研究成果を世に向うている、この部局の存在を抜きにしては、本科目は、もはや成立・運営が不可能である。

このように、自校史教育を支えるのは大学史研究である。したがって、大学史研究への期待はきわめて大きい。

III 私の授業実践（1999年度）から

—駿河台校舎（二部：文系学部）「高度成長と学生気質」（講座Ⅱ）の授業—

以下、私の具体的な授業実践例を一つだけ紹介する（実際の講演では二つの事例を紹介したが、ここでは紙幅の都合により、最初に

紹介した生田校舎（理工学部・農学部）「明治法律学校の卒業生たち」の授業報告は省略する。なお、この授業について関心がおありの方は、『紫紺の歴程—大学史紀要—』第4号（2000年3月）に掲載されている「（特集—明治大学史を問う）座談会 総合講座を担当して」を参照されたい。

1 目的

この回の目的については、シラバスを掲げる。

「現在、あなたは、この明治大学で、ひとりの大学生として、仲間とともに学び、生きているわけです。ところで、あなたは、なぜ、大学で学ぶことを決意したのですか。明治大学を選んだのはなぜですか。そして、あなたは今、明治大学での学生生活をどのように感じていますか。／今日の日本社会において、あなたが、大学で（とくに、この明治大学で）学ぶということは、いったい、どういうことなのでしょうか……。／いわゆる高度経済成長によって、戦後の日本社会は大きな変貌をとげましたが、大学もその例外ではありませんでした。高校・大学への進学率が急上昇して、「学歴社会」化が進行するとともに、大学は「大衆化」し、学生の意識も「大衆社会」に即応するように変容せざるを得なかったといわれます。／授業では、当時の学生諸君の声を、現に学生である、あなた方の意見や考え方と比較・対照しながら、あなたが今、明治大学で学ぶことの意味を、ともに問い合わせみてようと思います」（長沼；『1999年度 学部間共通総合講座シラバス』；傍線は引用者）

2 内容と方法

(1) 力点

この回で重視したことは、高度成長期の学生と現在の自分とを比較することによって大学生活の目的とは何か、明治大学で学んでいることの意味は何か、ということを自分自身が真正面から問う機会をつくってもらい、ユニバーシティ・アイデンティティを確立する一助とすることにあった。

(2) 課題

先に述べたように、私の授業では事前レポー

トがきわめて重要である。幸い、この回はレポートを課すことが求められている回であったので、13日前に出題し、7日前に回収、授業までに添削等終了、という日程で、つぎのような課題を提示した。

事前レポートの課題（原文のまま）
配布資料（別途配布）をよく読んで、つぎの問題に解答しなさい。

- 問1 史料1164から、当時の明治大学学生が「明大を受験した動機」および当時の明大生の「大学生活の目的」について、どのようなことがいえるか。
その特徴を記しなさい。
- 問2 史料1162から、当時の明治大学学生が明治大学での「講義・ゼミナール・大学生活」をどのように感じていたといえるか。その特徴を記しなさい。
- 問3 現在、明治大学の学生であるあなた自身は、上記二つの史料と比較・対照して、あなたが今、明治大学で学んでいることの意味をどのように考えているか。これまでの授業の成果をふまえて論じなさい。

ここでは、明治大学で学ぶことの意味について、高度成長期の学生と自分自身とを比較すること、当時と今とで変っていることと変わっていないことを探ることが主眼であった。なお、課題に提示した二つの史料は、いずれも『明治大学百年史』史料編に掲載されているものである。

(3) 授業の展開（90分間）

授業の展開は、つぎのとおり。

高度成長と大学の変容

【講義；一部ビデオ使用】

高度経済成長

大学の「大衆化」

大学生の生活と意識【講義】

明治大学学生の場合

あなたが今、明治大学で学ぶことの意味

【レポート紹介】

きょうの授業で学んだこと

【ミニ・レポート作成】

この回の授業用資料の作成は『明治大学百年史』の記述および歴史編纂事務室所蔵の史資料によっている。この回も、歴史編纂事務室の鈴木氏から貴重な助言を多数いただいた。

(4) 学生レポートの成果

事前レポートの内容としては、史料当時の時代背景として、高度成長、進学率、大学の「大衆化」、安保闘争の余波、大学の変容をあげるとともに、現在の明治大学学生として、入学目的、授業のあり方、学生の「モラルの低下」などについて述べたもののが多かった。また二部ということで社会人学生としての見解をまとめたものや、大学の大衆化について、「私は大学の大衆化が、学生の学力低下につながったと思うが、そのことが悪いとは考えていない。学校とは学ぶ場所だが、それは専門的な知識や技術を学ぶためだけではないと思う。色々な考えを持った人々が集まり、接觸できるようになったのは大学が大衆化されたからだと思う。そのことが、今の大学の良さであり、新たな教育を生むと考えます」と述べたレポートなどがあった。

また、明治大学で学ぶことの意味について、「〔入学前から〕明治大学の特色・学風を本当に理解している学生は、どれくらいいたのだろうか。私自身、明治大学の創立者である岸本辰雄、宮城浩蔵、矢代操という名前を大学のガイドブックで入学前に見て、何となく覚えていたぐらいです。しかし、総合講座の講義で、この3人の創立者を詳しく知り、今まで自分はあまりに明治大学のことを知らなかったと思い恥ずかしくなりました。(略)この大学で学んでいることの意味は、何よりも色々なことを吸収できることです。例えば、この総合講座の「日本近代史と明治大学」の講義では、大学が歩んできた歴史を知ることができた。自分の大学の歴史を学ぶという一風変わったこのような講義はとても良いものだと思う。これ一つをとっても私は明治大学で学ぶことの意味があると思う。違う観点から大学を見つめ直すと今まで考えもしなかったことが次々と見えてくる。一つ一つの授業により、自分の世界観が広がっていく。さらに、周囲の人々からも色々な影響を受ける」として、この科目の意義を高く評価するレポー

トもあった。

3 評価

(1) 成績評価

成績評価は、私の担当分に限っていえば、事前レポートの内容と出席点とを総合して算出した。

(2) 学生による授業評価（学生の意見・感想）

授業終了後のミニ・レポートによる授業評価の内容は、つぎのとおりである。

戦後日本の高度経済成長期に大学がどのように変わったか、変わらざるをえなかつたかが理解できた。印象に残ったことは当時の学生が、あの時代にすでに自らを「商品」と位置づけ、大学、社会との関係を考えていたことです

大学の大衆化から生まれた「学生商品論」 大衆化してもいいじゃないか

同年代の人がどんな考えを持ち、どんな目的で明大に入学してきたのか等 色々刺激

僕と考え方や意見がちがう人間がいっぱいいるのが大学なのだなあ やる気

自分と同じ悩みや希望を感じている人たちが他にもたくさんいる

他の学生たちも、今の私のように悩んでいた 勇気づけられました

共感 感動 このような考え方の人がこの大学内にいることは心強い

明大生も捨てたもんじゃない

社会人として今まで経験したことで、他の学生に役立つことがあれば是非、いろいろな話をしたいと考えた 私自身も他の学生から学びたいと思う

今日の授業は、もし自分がくじけそうになった時、ふと思いつ出せば、またがんばれる

何のために学問しているのか？ 学ぶとは何なのか？ わからなくなりました。

先生が生徒の間を歩く授業というのは大学に入って初めて

先生、そして学生は、本当は歩みよたいのだなあと感じました 学生のみなさんの感想と先生の必死さ 真剣に考え

生きるということは、すばらしいことなんだなあと思います

学生の意見も学校側である教授に言えた

意見の多様こそ「自由」ということだ
私には明治大学があつて再確認できました

明治大学に対して強く要望があるからこそ、大学の質が保たれているのではないか

これからの自分の人生の中で「日本近代史と明治大学」の講義で学んだことがきっといかせる

自分と同じ様に現在に未来に悩み、苦しみ、また夢を持っているのだとすると大学に足を踏み入れやすくなつた 本科目は明治大学を知るうえで私たちが学習する方向性を見出してくれる所以、これからも続けていくべきだと思う 特に低学年の人々にすすんで受講してもらうべきだと思う

IV よりよい「自校史教育」をめざして

最後に、以上のまとめとして、「自校史教育」のあり方について考えるとともに、よりよい「自校史教育」を実現するために、あえて問題提起を試みたいと思う。

1 これからも変わらぬ授業目標（私の考え方）

私にとって、この科目的目標は、これからも変わることはない。

それは〈明治大学で学ぶことの意味を、一人一人が立ち止まって考えるきっかけをつくる〉ということであり、〈これから自分が生きていくことの意味を確認するために、「大学の歴史との一体感、ユニバーシティ・アイデンティティ」を確立する〉ということである。すなわち、明治大学史をつうじての「自己発見」・「自己創造」・「自己獲得」である。

今後の課題は、「学問的思考力と健全な愛校心」の意味するものを自分なりに追究していくことと、「学問的・理論的なものと感性・心情」とのバランスをどうとるか、ということであろう。

2 今の私が抱える問題点

この科目を担当して、私が問題点として感じていることは、つぎの諸点である。

1) 事前に課題を出すことができない場合の授業運営をどうするか

レポートの代わりとしての討論の活用

これは、授業方法論にかかわるもので、とくに、この科目に特有のことではない。

2) いわゆるリレー式授業における一担当教師の役割とは

授業の連続性／担当者の個性・方法／討論の条件

これも、とくに、この科目に限らず、リレー式授業の一般的な問題ということになる。

3) 「自校史教育」は大学史教育あるいは歴史学教育なのか

「自校史教育」と大学史研究との関係

〈ケース・スタディ〉としての明治大学史

この問題は、「自校史教育」の意味そのものを問う、いわば根本的な私の疑問である。

「自校史教育」は、たしかに大学史教育であり、歴史学教育の側面をもつ。このこと自体は否定するものではない。問題は、大学の科目として「自校史」を素材に扱う場合、そこで何を教えるべきかという点について、さらに議論が深められるべきではないかということである。

4) 学生に何を伝えるのか

この授業に学生諸君が求めているものは何か

いったい、この科目を選択しようと思った学生諸君の動機は、どのようなところに

あるのだろうか。そして、われわれ授業を担当する者は、学生諸君が求めるものに対して、どのようにこたえていけばよいのであろうか。このことは、おそらく「学問的思考力」「学問的・理論的なもの」の中身を問うことになるであろう。

おわりに

以上、明治大学という場において自校史教育を担当している一人の教師として、感じたことを報告させていただいた。この科目に限らず、私は日々、よい授業を求めて試行錯誤している。〈よい授業〉とは何なのかと問われるなら、私は迷わず、「学生諸君がよい授業だと感じる授業がよい授業です」と答えたいたい。

私の責務は、学生諸君に「明治大学で学んでよかった」と感じてもらえるように“自転車をこぎ続ける”ことだと思っている。道は、まだまだ遠い。

引用文献

(本文中に明記した以外のもの；引用順)

メディア教育開発センターSCS講座「教育メディア科学」(2000年4月～7月)

織田 振準『大福帳による授業担当者と学生との意見交流・授業改善の試み』(平成7年度～8年度科学研究費 基盤研究(C)(2)研究資料集 課題番号:07808020) (1997年3月)

別府 昭郎『明治大学の誕生—創設の志と岸本辰雄—』(学文社、1999年)

鈴木 秀幸「「大学史の広がり」を考えて」(『大学アーカイブス』No.17, 1997年9月)

全国大学史資料協議会東日本部会規約

(名称)

第1条 この部会は、全国大学史資料協議会東日本部会と称する。

(目的)

第2条 この部会は、全国大学史資料協議会を構成する部会として、大学史に関する情報交換と研究、並びに会員相互の質的向上

と交流をはかる目的とする。

(事業)

第3条 前条の目的を達成するため次の事業を行う。

- (1) 大学史に関する情報交換
- (2) 史資料の収集、保存、利用に関する研究
- (3) 研究会（研修会）、講演会の開催

- (4) 会報等の発行
 (5) その他、前条の目的遂行に必要な事項
 (会員)
- 第4条 会員は、この規約の趣旨に賛同する東日本の大学・短期大学等をもって構成する。
- 2 個人会員については別に定める。
 (入・退会)
- 第5条 入会は、所定の入会申込書を部会長に提出し、幹事会の承認を受ける。
- 2 退会は、書面により部会長に届出る。
 (幹事)
- 第6条 部会に次の幹事をおく。
- (1) 部会長 1校
 - (2) 副部会長 2校
 - (3) 運営委員 若干
 - (4) 会計委員 2校
 - (5) 監査委員 2校
- 2 部会に顧問をおくことができる。
 (幹事の職務)
- 第7条 部会長は部会を代表し、会務を掌握する。
- 2 副部会長は部会長を補佐し、部会長に支障ある時はその職務を代行する。
- 3 運営委員は部会の運営につき審議・執行する。
- 4 会計委員は会の会計を担当する。
- 5 監査委員は会の経理を監査する。
- 6 幹事は、全国大学史資料協議会を構成する各部会幹事とともに、協議会の役員会を構成し、その運営を協議・決定する。
 (幹事の選出及び任期)
- 第8条 幹事は総会で選出し、任期を2年とする。但し再任は妨げない。
- 2 顧問の推戴は、総会において行う。
 (会議)
- 第9条 本部会に次の会議をおく。
- (1) 総会
 - (2) 幹事会
 - (3) 部会
- (総会)
- 第10条 総会は、通常総会及び臨時総会とする。
- 2 通常総会は、年1回(5月)開催する。
- 3 臨時総会は、幹事会が必要と認めたとき、もしくは、会員校の三分の一以上の要求が
- あったときに開催する。
- 4 総会は部会長が召集し、議長は会員校中から選出する。
- 5 総会は、会員校三分の二以上の出席をもって成立し、出席校の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- なお、欠席届をもって委任状とみなすことができる。但し、その場合、議決権は認めない。
- 6 総会は、次の事項を審議する。
- (1) 事業計画及び事業報告
 - (2) 予算及び決算
 - (3) その他重要な事項
- 7 総会における決定事項は、全国大学史資料協議会の総会に報告しなければならない。
 (幹事会)
- 第11条 幹事会の構成は、部会長、副部会長、運営委員、会計委員とし、監査委員は出席して意見を述べることができる。
- 2 幹事会は部会長が召集し、会の常務について審議する。
- 3 議長は部会長が務め、議決は三分の二以上を要する。
 (事務局)
- 第12条 事務局は、幹事の互選により選出された大学におく。
- 2 事務局校は、部会事務全般を担当する。
- 3 事務局校は、全国大学史資料協議会を構成する各部会事務局とともに、協議会事務全般を担当する。
 (分科会)
- 第13条 第3条の事業を行うため、必要に応じて分科会を設けることができる。
- 2 分科会については、別に定める。
 (経費・会計)
- 第14条 この会の経費は、会費及びその他の収入をもってあてる。
- 2 会費は、1会員校につき年額20,000円とする。
- 3 会費は、毎年7月末日までに、その年度分を納入しなければならない。
- 年度途中において加入した会員は、その1ヵ月後までに納入することとする。納入された会費は返戻しない。
- 4 会費を2年以上滞納した会員は、退会扱

いとする。

(事業年度及び会計年度)

第15条 事業年度及び会計年度は、毎年4月
1日から翌年3月末日までとする。

(決算報告)

第16条 決算報告は、監査委員の監査を得て
その証明書を添付し、通常総会に報告する。
(規約の変更)

第17条 この規約は、総会出席者の過半数の
賛同をもって変更することができる。

付 則

- 1 本規約の実施に必要な細則は、幹事会の
議を経て定める。
- 2 この規約は1996年4月1日から施行する。
なお、本規約の施行にともない「東日本
大学史連絡協議会規約」は廃止する。
- 3 この規約は2000年4月1日から施行する。

※太字の箇所が今回改正された条文

全国大学史資料協議会東日本部会会員名簿

(2000年9月16日現在)

顧 問

竹 市 知 弘

会員校・担当部課室

愛知大学・愛知大学50年史編纂委員会

〒441-8522 豊橋市町畠1-1
電話：0532-47-4138 FAX：0532-47-4196

学習院大学・学習院大学史料館

〒171-0588 豊島区目白1-5-1
電話：03-3986-0221（内6663）
FAX：03-5992-9219

神奈川大学・大学資料編纂室

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1
電話：045-481-5661 FAX：045-491-7915

関東学院・学院史資料室

〒236-8501 横浜市金沢区六浦町4834-1
電話：045-786-7049 FAX：045-786-7862

慶應義塾・福澤研究センター

〒108-8345 港区三田2-15-45
電話：03-5427-1063 FAX：03-5427-1605

惠泉女学院・史料室

〒156-0055 世田谷区船橋5-8-1
電話・FAX：03-3303-6920

國學院大學・校史資料課

〒150-8440 渋谷区東4-10-28
電話：03-5466-0104 FAX：03-5485-0152

国際基督教大学・編年史室

〒181-8585 三鷹市大沢3-10-2
電話：0422-33-3057 FAX：0422-33-3634

国士館大学・国士館資料室

〒154-8586 世田谷区若林4-31-10
柴田会館4階
電話：03-5481-5340

実践女子学園・総務部学園史資料担当

〒191-8510 日野市大坂上4-1-1
電話：042-585-8811 FAX：042-585-8808

上智大学・総合調整室別室

〒102-8554 千代田区紀尾井町7-1
電話：03-3238-3294 FAX：03-3238-3539

聖学院・本部理事長室

〒114-8574 北区中里3-12-2
電話：03-3917-8332 FAX：03-3940-3798

成蹊学園・総務部総務課

〒180-8633 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1
電話：0422-37-3517 FAX：0422-37-3868

専修大学・大学史資料室

〒101-8425 千代田区神田神保町3-8
電話：03-3265-5879 FAX：03-3265-5923

創価大学・創価教育研究センター

〒192-8577 八王子市丹木町1-236
電話：0426-91-3191

拓殖大学・創立百年史編纂室

〒112-8585 文京区小日向3-4-14
電話：03-3947-2261 FAX：03-3947-7265

玉川大学・教育博物館事務室

〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
電話・FAX：0427-39-8643

大乘淑徳学園・長谷川仏教文化研究所

〒174-8645 板橋区前野町5-5-2
電話：03-5392-8855 FAX：03-5392-8853

千葉商科大学・史料編纂室

〒272-8521 市川市国府台1-3-1
電話：047-372-4111（内747）

中央大学・大学史編纂課

〒192-0393 八王子市東中野742-1
電話：0426-74-2132 FAX：0426-74-2203

津田塾大学・津田梅子資料室

〒187-8577 小平市津田町2-1-1
電話：042-342-5249 FAX：042-342-5219

東海大学・文書課史料編纂委員会事務室

〒151-8677 渋谷区富ヶ谷2-28-4
電話：03-3467-2211（内430・431）
FAX：03-3485-4962

東京基督教大学・歴史資料保存委員会

〒270-1347 千葉県印西市内野
3丁目301-5-1
電話：0476-46-1131 FAX：0476-46-1405

東京経済大学・100年史編纂室

〒185-8502 国分寺市南町1-7
電話：042-328-7955 FAX：042-328-7500

東京女子医科大学・史料室・吉岡彌生記念室

〒162-8666 新宿区河田町8-1
電話：03-3353-8111(内22213)
FAX：03-3353-8209

東京女子大学・大学資料室

〒167-8585 杉並区善福寺2-6-1
電話：03-3395-1211(代)

東京電機大学・総務部企画調査課

〒101-8457 千代田区神田錦町2-2
電話：03-5280-3627 FAX：03-5280-3566

URL : <http://www.dendai.ac.jp/>

東京農業大学・図書館

〒156-8502 世田谷区桜ヶ丘1-1-1
電話：03-5477-2525 FAX：03-5477-2632

東北学院・広報室

〒980-8511 仙台市青葉区土樋1丁目3-1
電話：022-264-6354・6470
FAX：022-264-6458

東北大・百年史編纂室

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
電話：022-217-5041 FAX：022-217-5042

記念資料室

電話：022-274-8242

URL : <http://www.library.tohoku.ac.jp.archives/>

東洋大学・井上円了記念学術センター

〒112-8606 文京区白山5-28-20
電話：03-3945-7555 FAX：03-3945-7601

獨協学園・百年史編纂室

〒340-0042 草加市学園町1-1
電話：0489-42-1111（内5267・5260）
FAX：0489-42-6756

日本工業大学・総務課

〒345-8501 埼玉県南埼玉郡
宮代町学園台4-1
電話：0480-34-4111(代)
FAX：0480-34-2941

日本女子大学・成瀬記念館

〒112-8681 文京区目白台2-8-1
電話：03-3942-6187 FAX：03-3942-6182

日本大学・広報部大学史編纂課

〒102-8275 千代田区九段南4丁目8-24
電話：03-5275-8036 FAX：03-5275-8325

URL : <http://www.nihon-u.ac.jp>

法政大学・総務部大学史編纂室

〒102-8160 千代田区富士見2-17-1
電話：03-3264-9365 FAX：03-3264-9639

宮城学院・資料室

〒981-8557 仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1
電話：022-279-7765 FAX：022-279-4707

武蔵学園・記念室

〒176-8533 練馬区豊玉上1-26-1
電話・FAX：03-5984-3748

武蔵野美術大学・大学史史料室

〒187-8505 小平市小川町1-736
電話：042-341-5011 FAX：042-342-5173

URL : <http://www.musabi.ac.jp/history>
明治大学・総務部歴史編纂事務室

〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1
電話：03-3296-4085 FAX：03-3296-4086

立教大学・図書館大学史資料室

〒171-8501 豊島区西池袋3-34-1
電話：03-3985-2693 FAX：03-3985-2819

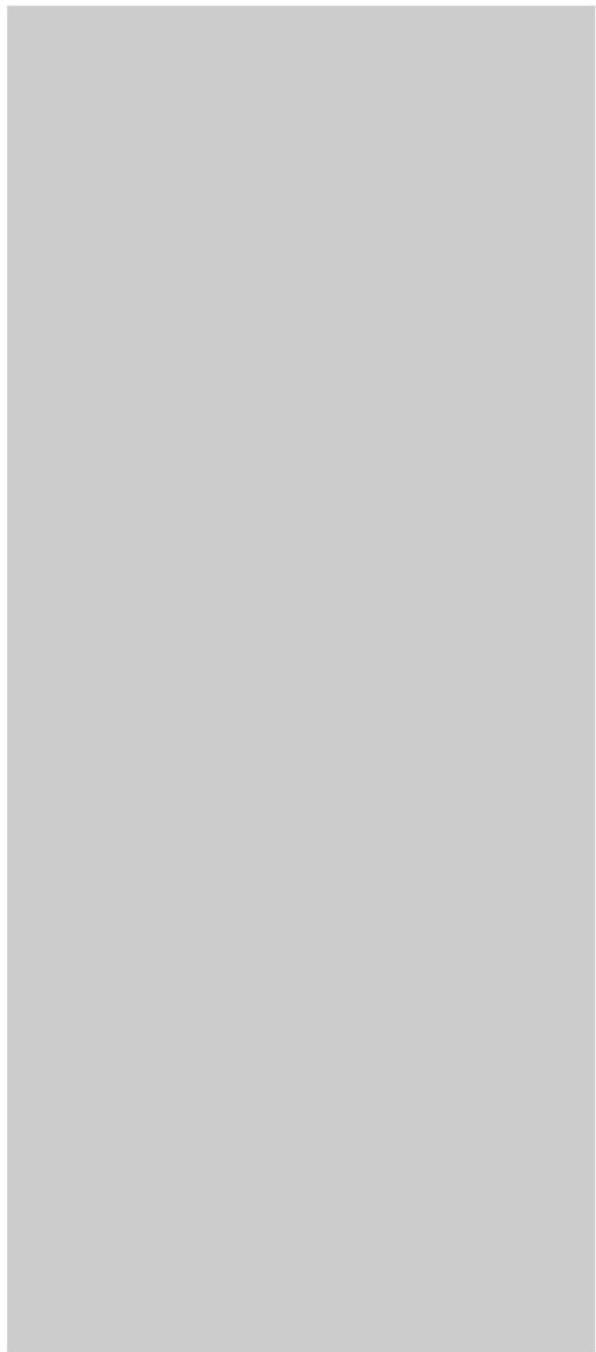
立正大学・企画広報室

〒141-8602 品川区大崎4-2-16
電話：03-3492-5165 FAX：03-5487-3340

URL : <http://www.ris.ac.jp>

早稲田大学・大学史資料センター

〒169-8050 新宿区西早稲田1-6-1
電話：03-5286-1814 FAX：03-5286-1815



全国大学史資料協議会東日本部会 2000年度総会議事録（抄）

日 時 2000年5月18日(木) 14時～16時
会 場 東京大学 山上会館201・202会議室
出席校 25大学 6個人会員
オブザーバー 荘沢 賢一氏
(創価大学施設管理部管理課)
計 46名
開会の挨拶 神奈川大学 澤木 武美氏

議長の選出

- 議 長 國學院大學 益井 邦夫氏
副議長 立教大学 池田 貞夫氏
議 事 1. 1999年度事業報告・同決算報告について（承認）
2. 2000年度事業計画案・同予算案について（承認）
3. 規約の改正（承認）
4. 役員の改選（承認）
5. その他

閉会の挨拶 東海大学 瀬水 澄夫氏
懇 親 会 15時30分～17時 出席者46名

全国大学史資料協議会東日本部会 幹事会議事録（抄）

- 第26回 2000年3月16日(木) 13時～15時
会 場 東京大学 山上会館201・202会議室
出席校 學習院大學 神奈川大學 慶應義塾
國學院大學 実践女子大學 中央大學
東海大學 武藏野美術大學 明治大學
中野 実氏
議 事 (1) 2000年度の部会運営について
(2) 2000年度の部会総会について
(3) その他
- 第27回 2000年4月27日(木) 13時～15時
会 場 國學院大學 常盤松校舎2号館3F
出席校 神奈川大学 慶應義塾 國學院大學
実践女子大学 中央大学 東海大学
東京農業大学 日本大学
武藏野美術大学 明治大学
中野 実氏
議 事 (1) 2000年度の部会総会について
(2) 部会費の徴収について
(3) その他
- 第28回 2000年5月18日(木) 13時～14時
会 場 東京大学 山上会館201・202会議室
出席校 學習院大學 神奈川大學 慶應義塾
國學院大學 実践女子大學 中央大學
東海大學 東京農業大學 日本大學
武藏野美術大學 明治大學
中野 実氏
議 事 (1) 2000年度部会総会の準備について
(2) その他
- 第29回 2000年6月15日(木) 14時～16時
会 場 東海大学 代々木校舎B会議棟

第2会議室

出席校 学習院大学 神奈川大学 慶應義塾
國學院大學 実践女子大学 中央大学
東海大学 東洋大学 日本大学
武藏野美術大学 明治大学
中野 実氏

議 事 (1) 2000年度の出版事業について
(2) その他

第30回 2000年 7月13日(木) 14時～15時

会 場 明治大学 リバティータワー
23階第8会議室

出席校 学習院大学 神奈川大学 慶應義塾
國學院大學 中央大学 東海大学
東洋大学 日本大学 武藏野美術大学
明治大学 中野 実氏

議 事 (1) 2000年度の部会運営について
(2) 2000年度の出版事業について
(3) その他

全国大学史資料協議会東日本部会 研究部会記録（抄）

第20回 2000年 3月16日(木) 15時～17時
会 場 東京大学 山上会館201・202会議室
参加校 21大学 2個人会員 33名
報 告 中野 実氏（東京大学史史料室）
「『大学史をつくる』編さんをめぐって」
※研究部会の内容につきましては、本号に掲載した中野実氏の報告をご参照ください。

第21回 2000年 7月13日(木) 15時～17時
会 場 明治大学 リバティータワー
23階第8会議室
参加校 23大学 2個人会員 38名
オブザーバー 荘沢 賢一氏
(創価大学)

問題提起 鈴木 秀幸氏
(明治大学総務部歴史編纂事務室)
「明治大学における授業『日本近代史と明治大学』について」

報 告 長沼 秀明氏（明治大学講師）
授業としての自校史教育
「明治大学における授業実践」
※研究部会の内容につきましては、本号に掲載した鈴木秀幸氏並びに長沼秀明氏の報告をご参照ください。

三二情報

明治大学だより

このたび、明治大学大学史料委員会が『大学史紀要 紫紺の歴程』第4号を刊行しました。今号は1997年度より学内のカリキュラムに盛り込まれた学部間共通の「日本近代史と明治大学」という授業について、特集してあります。また、歴史編纂事務室単独で刊行している『歴史編纂事務室報告』の第21号は「明治大学と校友」の続編であり、校友の創設した学校の内、西日本を扱っています。

展示関係では、駿河台校舎では、「記念品・記念物に見る明治大学史」と題し、大学会館1階で6月9日～10月30日まで開催。また、和泉校舎では「明治大学和泉小史展」と題し、第1校舎で6月9日～8月30日まで開催しました。

ご案内

全国大学史資料協議会及び同協議会東日本部会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記へご連絡ください。

神奈川大学・大学資料編纂室

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

☎ 045-481-5661

中央大学・大学史編纂課

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

☎ 0426-74-2132

会報編集担当

神奈川大学大学資料編纂室

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

☎ 045-481-5661

東海大学文書課史料編纂委員会事務室

〒151-8677 渋谷区富ヶ谷2-28-4

☎ 03-3467-2211

中野 実（東京大学史史料室）

〒113-8654 文京区本郷7-3-1

☎ 03-5841-2077